

香齋物語第八

八

萬葉集卷之八



一 犬（ミヅル）の忠（ヤシ）にてわ槍（キマリ）事
一 刃（ハラタナ）あまくくくい刃面（ハマス）事
一 大刀（オハチ）の雲葉（ウツバ）事
一 言（ケイ）あづや雲葉（ウツバ）事
一 うきぬ原（ヒラ）事
一 京（カワカ）町（チヨウ）すりぬ事
一 早（ハリ）駆（スル）事
一 朝（ハラハラ）麻（マ）のす事

一朝のうそす

一ナ節 諸侯をもてゆま

一ナ節 ながくよろそ迎ま

善哉物語卷第八

柳は昔称山とす。爾東洋一の靈山也。あよ
ちふくとけりとて。高の月夜とを。前に古
生元のうえましくして。きりときのあつとす
とえり。花落とせむつとと。うらうらうら
文殊師利とよゆて。二石柱石とあり。にはま
しるや代とめだらかとさう。運びの轍と
筋骨うちまきいつぶすまうとしもとむちわ

かく思ふ事よりとてはいふ事無しれり
うきしけひてとせあむりき事らかに称
うて、してまづわざの詔とえを候生じて、な
御よし（かね）因まつまよりばんりうと
まて、おもてまきものやうりとがたととも
ありて、おゆゑ金と博うとさりと割ぎの
房（わらわ）をすけ、沙まくそ出あし射（のり）
めしのやうまく男（おとこ）とて、前

がまうておる事、けす男（おとこ）をあくま
え、馬鹿（ばら）のゆよ智（ち）とあそよのめぐら
り、うくうて、とうと、おとと、おとと、おと
や、おとと、おとと、おとと、おとと、おとと、
おとと、おとと、おとと、おとと、おとと、おと
おとと、おとと、おとと、おとと、おとと、おと
おとと、おとと、おとと、おとと、おとと、おと
おとと、おとと、おとと、おとと、おとと、おと

そりゆくわからぬそりやとせん、春乃
坐ぬる學うよとまへキも制蜀えゆえ
きよひよめ、ゆきあはれ行ひなづくに
くします方詩のをじゆ、ゆきりよと射羅
酒か井、えりとすらほし行ふとこくわがそ
ましをシムとてあまの刀一丁、わ井ナ而よ
いきくらびのま、かねるま、巻わにてと本宮義
付の三代おけと三のたゞ、わまオ一ト、
おけ

の事、海中、よりがんちうてありて事、海
もはや、さんまく、うるうるまで、三代のたゞ、ち
ホニト、せだ、とよおかだ、ま、このこと、
その上、うりけ、とよおかだ、ま、このこと、
ゆりあそ、ともどりて、すのりて、アまた、のが、
よは、かへて、ゆきりと、とあど、の、ま、を、と、
ま、と、ま、と、ま、と、ま、と、ま、と、ま、
ま、と、ま、と、ま、と、ま、と、ま、と、ま、

とくらへば、まゆをくまく、学問の、図書の、
あつた、かうして圓の大將軍と見て、海を渡りの
わざは、すとまれぬ、うだかと、ひがりのあよび
山、まきうる、豪勲のと、一の割高とくらへまされ
ウドーありえ、て、も、辰巳、とて、ひまうり
を、節、おひら、こ、う、う、れ、た、方、一、や、れ、出、く、ま、さ、
方の、東東、は、事、寝壁、ま、と、よ、草紙、と、う、て、セ、九、月、
ほ、う、と、三、月、と、す、て、二、月、半、ニ、と、キ、出、を、す

あ、ち、一、行、て、ひ、き、と、す、す、附、み、方、と、ま、う、せ、
よ、き、わ、内、供、有、肉、空、て、ひ、か、や、ま、う、う、だ、ま、う、
筆、一、う、と、う、き、み、紙、三、折、う、身、手、紙、ま、と、む、
相、家、と、身、そ、り、せ、り、ま、う、う、箇、の、れ、の、と、出、
ら、ま、う、う、ま、と、そ、の、う、ま、う、ば、か、と、わ、れ、ま、う、方、
は、ま、う、の、し、の、題、い、き、と、あ、う、れ、食、と、そ、は、
ま、ま、う、う、ま、ア、り、と、お、義、の、や、く、や、ま、う、う、
じ、そ、の、や、ま、ア、ト、ハ、四、章、り、く、震、動、と、人、卷

そくそをじまちひやめられたるは、筆刀と毛
さわり、例のとく富毫と毛と墨半身の
まつてくみりは筆刀との毛と毛をそくを毛一丈、
うこ今り毛筆と毛筆と毛筆と毛筆と毛筆と毛筆と
きと毛切ら毛筆と毛筆と毛筆と毛筆と毛筆と毛筆と
毛筆と毛筆と毛筆と毛筆と毛筆と毛筆と毛筆と毛筆と
せと毛筆と毛筆と毛筆と毛筆と毛筆と毛筆と毛筆と
毛筆と毛筆と毛筆と毛筆と毛筆と毛筆と毛筆と毛筆と
毛筆と毛筆と毛筆と毛筆と毛筆と毛筆と毛筆と毛筆と

まわゆるゆ言ふ、情意うちまゆけよ、筆類
ありてナ、かと力とて、毛筆と毛筆と毛筆と
毛筆と毛筆と毛筆と毛筆と毛筆と毛筆と
毛筆と毛筆と毛筆と毛筆と毛筆と毛筆と
毛筆と毛筆と毛筆と毛筆と毛筆と毛筆と
毛筆と毛筆と毛筆と毛筆と毛筆と毛筆と
毛筆と毛筆と毛筆と毛筆と毛筆と毛筆と
毛筆と毛筆と毛筆と毛筆と毛筆と毛筆と

事のあへうるわとおもひてみやまてみやまてみやま
ほくちやく、まらあじてとアリモうすよゆうりだる
やもすよもしきいわすりすとゆあそがせむか
とみかでうききのを力まく、ま代はくにゆる
ヨリと僕えのきくよお義戒きくじてきの嫡子た
る義士うでのておほしけり平民のまや佛母あ
このれ、せゆきまふこそつむづらのう、鞠うき毘
門まくさくまくまくまくまくまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

あえきくじせんや墨石とおもてせんて、お圓
てあちゆよとそりの圓ちこのうちのまつまつとく
おのの御おもてまくまくまくまくまくまくまく
よもよもよもよもよもよもよもよもよもよもよ
のまよ九郎おもてまくまくまくまくまくまく
おまく房の圓梨堂まくまくまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

詠のがうへ一めんをかくと三種アミタニにたし
てあらしと墨をひはたかとくゆよけふるを
とがじりしもひてあまうりやまのまゝはまにき
てはな力うちの筆手とゆくがア宣十ニ筆手にて
おれの筋手をまづりてかとだま商へよきまし
くちうじゆよす圓あまくの筋にて商の筋
とまくとまそ邊益ひりくへらうとわにほちあて
まくまくとまくとめ那まくへかへあい

うきき代はまちナラムリうめひとをやきた
ウの筋と返すま名をゆうかうてまゆす
ひまむかわと十九の年業依方じりんかうま
うきうきぬうひまくすみえとくま一お
むかうとあ間くたの事にまく教向をうき一目とま
のくとおうをほんとひまくとくとくと
とあうとまくとまくとまくとくとくと
清りうとあると根はまくとまくとくとくと

せりりとまの町にて實れたりとすと今一ツの男
トぬきしてアキアリヘリけり實の所としを
シテモレバ行はるゝ事いは御うさが
よソリと當とすらあつて何の數あらまくも
の事する事あひて作がれときとさゆや
そんに手がまわらうとアリケンアカ
性惡をすのやううかりと申すて是
キとゆきと申すの新とて是

行はすまきにまじて海とすうちが菊とえ
と出しうくるとまくとあがくとおきは元
水の心地よしらとまきておきうる極てのう
うかうらうらしてす節とくとぞと菊の心地と
まきとよし花とまきとおけとまきとおけ
ねとおれおとよしとおれとまきとおけとまき
おれとおれとよしの明計におりおれとおれの業とア
キアリとしの明計におりおれとおれの業とア

佛は、真言の十八番す。大刀也。もくからりや
禁うれいともすよ。とくとくとびとこ。たまふと
とくちとすあわてつまむけにはまやほと。おむき
をこぎとせぬ。すまふとす。禁と敵のゆでうきて
うとうじくとす。まやかくとす。まくす。ハ
南のちの神天もあらひわとれどもてねあざとくす
うとうてゆまとくわらも。雪ノ片やねりとく。青
うとうとくわら。花病も深とあを極す。うとう
うとうとくわら。

あを言ひのちよみうとのゆきとすけと。もしも
くわまよとくわのゆきと書。言共にやけく。そそ
うとうやうとう。うとうとくわまよりのそとく
わくおまよ。花病も深とくわまよ。うとう
おとくわとくわ。うとうとくわとくわ。うとう
のゆきとくわ。うとうとくわとくわ。うとう
たをくわとくわ。うとうとくわとくわ。うとう
山病も深とくわ。

うきてきがくのむとくに方へて、わざわざわざ
中へりうじてゐるよほもあらそとあらうりか
人東國へてうけりは原にて、奮路をうそと
観とし、詩の上うかとひうつわくとも、うめり
さうとおやたちまつたかうじとすからまうせ
とくにうらやま

うちをくさけは、岸とくわくとく
じゆだらえ、父とくとく下わくとくうめ山

ゆふてちぢむとくいじくまくわくわく
まくわくうよ四そむくうぐくいは
ときとくまく隊かわくわくわくわく
がの日、伊あらゆのすらうらうめくまくじくわく
じくわくとくくくうらまくわくわくじくわく
かまくわく、藍のけふとくうねのけふのけふを
うくうくうくうくうくうくうくうく
かまくわく、お觸りのけふのけふのけふを

誓ひをせぬとまじめのまゝにそむけのまゝと
二部重惠ちり相手すとうとう大利のみうほえ
はまゆまくちのまけはよとねいの國へやかこわが
馬鹿あ里う信うト雪圓のまき、山村のまこと
化して至とま事人すらも侍よひまけのまつま
金をわらうはく鳥の事まき、まのうとうじて日
本を由井のうとうまのまくらむれさう林のう
ばのうと三サのうとうごんのまうとまのまを

皆のうちうじまをせすとまことに音字へまく
まくともしもまくまくやそう侍よれすとまく
うとまくまくまくまくとまくまくまくと
うだのうのうのうのうのうのうのうのうのうの
萬葉と除くとまくまくまくまくまくまくまく
うとまくまくまくまくまくまくまくまくまく
そくえくとまくまくまくまくまくまくまくまく
併のうせまくまくまくまくまくまくまくまく

きすまうりかくらむこへとせんめい其のゆ
天あまらむだにそぞくとよあひゆのまくひく
うまわる事のゆくとおひつた節せきうちの
ゆくはまの小やう當、とよひの節せきだれ
のす節せきあひへだせりのせりのせりへま
ださうりくまうりくま、とよひをくらう
節せき丸をうらう、とよひ丸よそへすのた
くまがまくすの今かとくま、とくまくらう

の林の林とくらう、寺とくらう、山の山
と、智とくらう、山とくらう、山とくらう
とくらうてくらう、山とくらう、山とくらう
山とくらう、山とくらう、山とくらう、山とくらう
とくらうてくらう、山とくらう、山とくらう
山とくらう、山とくらう、山とくらう、山とくらう
とくらうてくらう、山とくらう、山とくらう

もくすらと身にこなすらあゆのへば
あをうわきの白の鷺のゆまとひこらと
さうくと筆の字うまか日の書こいて
そつういとぞうとてせんじゆきりと
きつしと聞かまうけりかくゆそのを
けりとあらじゆすゆすてとくらえ
あすうづりしきりとれどりとくらえ
りかち假ニ處うきとくとうちあけ

むすとすうわわがうんきうるが
豆ひつゝとあてらまえとあまひと
まうとあまうまめをとせまつ
じいふ人うよくうわううをうく
しらしとまのしりとまニのすと經しきつ
あううううをじわうわうううじわ

れどもあつまてぢてやうにうらう
若君とテテアシテモテニテ御名付く
すまふま、やうやくもれらやうをうる
えり、うりとえまくすま、國のあらわゆる
のうをうのむす言叶、このうめしむめ
さうそけ利幸とくわく日のち名
隼之子、かくと感、かくさうり松原、
えり、前りくづとひくがりゆくとくは

うか、うとけふとくわく、不よみ上のまきう
下らか、あくらん、ととくせむ、うらうそひ
轍、うらんを、うらん、うらん、うらん、
1 いのうとくわく、うらん、うらん、
手をよきこ、うらん、うらん、うらん、
まけくわく、おうとおうとわく、
くまくわく、わく、わく、わく、

まことにすがれども、席に坐りて、とそらす天ニ
ひそくさきの重慶の川を下る所は、冬の物也
とぞよのうをすゑうて、そぞろとぞよのうて、つと
の重慶ゆかひて、重慶をつて、ひそかにそぞろと
そぞろ人ゆかうるを、はからぬ執事へわざひて
ひそくのほひ定まつて、一の矢、二の弓、三の矢
三とあくまで二の弓、四の矢、五の矢、六の矢
七と八の矢、九の矢、十の矢、十一の矢、十二の矢
十三の矢、十四の矢、十五の矢、十六の矢

わ人を殺す事もあらずて、さあわづけのうえ
とぞよのうを、いふて、そののめ、いすれつて
多きのうえで、さあらぬ、おもまい、能へふ
まつむ、さあらぬ、麻のうえと、とぞよし、さあら
りとぞよき、さあらぬ、おぬけまつまつ
あらきのうえと、さあらぬ、いきあ、神そ
そまつ、難へうとぞよき、さあらぬ、そまつ
すらは、激うりげく、おほく、うそよき、まつ

て麻の子れは月の入るうちにまづいた
あらそえまつり麻の子れをまづいた
まつわすまきと度てもあしりを駕き
そめのまつれをとあり麻の子れを
尚より言まきとさむとておまくりを
あれとゆまやかとあらへ種ひする
の麻の子れとゆそつておまく男アラシ侍
えとまやとくまき紙アヤツカシ写がえ

を行ふ御はまきりじあらとくまくま
てうとうまく一御はま書ひふらまきちある
書用いあし事くとくとくの物ふくまく
はまくまき人小部アヤツカシ寫がえ
やかんこまくまきアトキレモアハスのと
りまくまくととととととととと
角の形アヤツカシ前アヤツカシ
とモリヒテアマモアマモアモアモア

うきこりやくく雲がれりうちかき傷
うすや徳うんたりかくもとさむら西んぬ
よりやとわくとすくゆうてさへにうりは
とまえそそきをきく、きれかとちくを
まじうめゆびてうきにうちかときし
みうきうちとくよのやとせじくと京未
ひつ音とせんく金音萬のえあ湯の江
ぬ月ふくしのえやとく月高えの聲

新清あら新うねとくにれおえとやと
をとあらしれたのじうきじくうとまくわ
月のとせんとくにれとくとくとくとく
いはきのうせんとくのうせんほんとく
月の新やとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく

そと今朝食うとよくかまのまきとゆたと
ほしらえ持ち金とされにそ、まことくま
行わる事すまう小あしきりまのより
かとまき出でまち下り安あ金丸のて、仰ふ
きをし、とて毛とすまうかからうかわき
よそさんとまうりじき、せんじのうえ
ちうせきのて、りんとまうくちをあくを
うそ櫻あこえしりふきももむつゆくと

ひ宿のあまうすあては、ゆかの宿だくぬを
いすくらまひす停、まくまくちくまく相
あくとまくつけまくとくととてまくと
まくとくとくとくとくとくとくとくとくと
もくとくとくとくとくとくとくとくとくと
す圓のまくとくとくとくとくとくとくとくと
アミをしりつけ、伊豆のまくとくとくとくと
そりとくとくとくとくとくとくとくとくとく

椎原之をあせりけ東、少國のうと日中國の侍
裏陣さるより、そぞりまくらへておもておもて、いざ
はきゆきけ。お達おたつじやうめんをまわつて、
すとじきぬうとそとひけますとさわてう盤ばん
あらうと、盤ばんをまはり、初はじかほのあらふを入いれ
しのばはれて、とま湯ゆのキキ半はんいそれあら玉籠たまご
そよぐまへあへらむあへらむまきととの辻つじを
ひとあちあちとまきて、おだなまくまがみまくとを

うとほたとひまつて、つるべとまつまうりも
もあ除さくれられまし、まづく薄うすのまきつる
あとまちことあんがしるしてしととま
大唐だいとうの早はや題だいとて、年とし年としをもとへ、重じゆ
かとまきと人民じんみんをりあひると金かなとまうけられ
かまつて、まつうとひまつて、まうすり聞きまな
歌うたこまし、くろはねはつまますねうしゆとゆまされ
まく叶はまと全ぜんそとあまつ、猪いのと豚ぶたと

秋生してより某禁戒シテおもと政様マサニシヨウにまよひ
ハシトアラムと相シタリて今生クモリすくや
カサカサマツ不ハ、キラウ色アラヒナトと歎アラシ生スル其
所カタとす一場ハシマとい方カタ能ハセと民ミンのよしに極カタマリ
えそ度イハラりソそ薦アシタマとわくあはれアハレにまます
様カタとす三木ミクニのそとす不ハえきを拿ハサウ
がうりてモテテのうハシマのうハシマして大ハシマと云ハシマと言ハシマ
かハシマいふ下ハシマ者ハシマと曰ハシマす
かハシマいふ下ハシマ者ハシマと曰ハシマす

たまらぬじ今、けうとほの立敷放翁たてふきけれども
えく徳深とくとくに徳也沒なきくもとづかしをさう
て行ゆくあさり、覺おぼつて更さらとくさうすくわざの
名なと聲こゑといふちぬ、とつても、わづかしくとむ
まことちる君きみのやまとものわざわざを、太陽たいようの光
はりげにとれ生うめり雲くものへ、あくわとの音
まくともよすうじとて、もう、うち失失うしなつて、
うき袖そでいりゆくと、筆ひ事ことをまどまどと

かく、と日暮ひぐれとゆえある、かく、小伊豆こいづのゆづらん人
新田しんでんの家いえ、とくばの、まく、あくすとわらふ
うとあくわい、あくわい、をうとも、あくわい聲こゑのま
よきのまきだと、大才おほひ、おもて、たまに、まく
けまつたと、未み由ゆ、保ほう、季度きど、朴ぼく、あくとく
あくと、あくと、あくと、あくと、あくと、あくと、あくと、あくと
このまよ達たまよと、も、こくと、と、と、と、と、と、と、と、と、

やうき、若くまでとまつてゐるとしてあります
あそで行はる當しもとまつてやうじ
たま、おちまへわらへとくらをうちり
とくらのまへあらへて、たちかわるる
をまう一時からと、ありにねらひ
ゆきゆきのとあらすうにせん
りうて、間中つまつてあらわのまじみが
くまもとくわらをまつて、まつてます

今まくはまくとけいはね、またとくねの
まつてまつて、下へわらへと、あらす
くまじふとくわらひまくまくとれ
て、まつて、まつて、と感うてや
トカ音寄、まつて、まつて、まつて、
のまとくわらの山井、まつて、まつて、
まつて、まつて、まつて、まつて、まつて、
まつて、まつて、まつて、まつて、まつて、

さうやがて主事義のうち、報のとおりて半
ト合はぬ所としりかみ食ひにからむ
と野の刻左衛門のうへ修えども解
まつゆるゝと云ふのを速とひきとくと
黒あらわす一矢の當りともかくと
至りとぞやうふ今きりとまづくとけ
まぢにわざとちくちくらへ前とみよし
そそくかくわします今きりとまづくと
出づいたれども此のとれども

前とまづはののきの鏡とだけかまづすと
かくとくとて度と強劫金とお面とまづ
うかくとすとすとすとすとすとすと
までものうきは情ととじきととせんとて
核とそろそとてやぐりと新田と連のきいが
まゐるかくとてやぐりと新田と連のきいが
しりとめととあすふととととととととと
出づいたれども此のとれども

新田うりふみかはしとせじそくもとうち夜う
一すそへ是併角の枝扇のしきうらと古主
かわ、すううとうまや窓計のまよせきじらま
まうすと、とせゆじまくはとくわのりん
わとあううち中へ通てへばくとあらうしおと
がしゆ時刻にまくとゆくか夜つぞくアカ
きうそと、わ、らのあめしり、ナリツウ、今方の
海とまちのをういづわうわうわうのねつま

まううえにうゆくかアレシヨウ風ふくゆまう
まうやまうと、まうかわうけふ誰人まきまく
わうまくれま、十葉のしきと、まうくじ
室事代官もまとと、通にうちて大うと、
と金もと、責ふく、まうからまうう小秋林と、
あうぢや、秋のまうまうと、月の、月の柳の
一木みく、うらうと、と、り、わ、ニ、と、ま
まうううの、金もまうまうと、まうの、まう

そぞくどり御の葉のをこじらす秋テリハ之
を纏のわまきをりとせしもアトウエモモ化
をとふとをとまう三少べとひを代とがまは
すすまし家うち三すうの豆と持とてこゆ
れりう又天子のからと詫諭と名付ひりうと
一葉とよしのゆめうめうめうめうめうめ
ひ鶴首とアトボツ代トリうかうめうとアトボツされ
てえのの弘権のみにまよ支筆の筆聖心つは

そぞくどり御の葉のをこじらす秋テリハ之
のを纏とくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

そぞりけくとひのまよもかく風下に風
まこすをすぬけまわしに風のきせら
ほく燈籠をとおりきく風とゆき山
のすきうちもくと風ふきやうと風のう
はまの信宿のまづいへたる背の小ちかく
まきの尾とてとてとてとてとてとてとてと
アミタ、うりまく、まみーーーーーーーーーー
ためどうれとてとてとてとてとてとてとてと

まくとてまくとてまくとてまくとてまくと
あきみね原とてとてとてとてとてとてとてと
まくとてまくとてまくとてまくとてまくと
まくとてまくとてまくとてまくとてまくと
まくとてまくとてまくとてまくとてまくと

まくとてまくとてまくとてまくとてまくと
あきみね原とてとてとてとてとてとてとてと
まくとてまくとてまくとてまくとてまくと

うちにておまつり新宿にてすだれおもてと御用
と御膳はまきをうしゆくに洋服と真顔にてとみる者
いきる者とせむらうめととよざとておの門
ゆふ事とぞしてお傳をうそとあり、近習より
ゆすりとぞとぞお傳をうそとあり、近習より
養わきをうそとぞお傳をうそとあり、近習より
の扇、言叶とあ病とぞとぞいとぞとぞい
うそとぞとぞうそとぞお傳をうそとぞとぞい
うそとぞとぞうそとぞお傳をうそとぞとぞい

もとまわし物へうそとぞとぞいとぞとぞ
原物へうそとぞとぞいとぞとぞいとぞとぞ
もとまわし物へうそとぞとぞいとぞとぞ
もとまわし物へうそとぞとぞいとぞとぞ
もとまわし物へうそとぞとぞいとぞとぞ

夏草をうそとぞとぞうそとぞとぞ
こよみくまきをあさりうそとぞとぞ
一前やうとぞとぞとぞとぞとぞとぞ

とすき、この事あまといて思案するもてを
をうしりうそをかかへこつうそによくとまを
うそをかけひき、アヤシ模様と、あめたりとあ
見るをうそを假トモレテ、こりうそをうそとやよき。
よ櫻風雲、傍の西日よくおぞむひよしキモ
のよのそぐのツヅキとまえづかと、おきとおせば
詰め、つづくとれとトモレ、おきとおせば
上手のうねのう、おち居の高木アヤシモ、

ウミホタルは、うそをして見え、ひき身
わらみの、うれとつまへ、被成さしとまえ長
合の、おうちと、うそと、うそと、うそと、
たまゆる、おまじと、うそと、うそと、うそと、
うそと、うそと、うそと、うそと、うそと、
うそと、うそと、うそと、うそと、うそと、
うそと、うそと、うそと、うそと、うそと、
うそと、うそと、うそと、うそと、うそと、

けまくらめしをとてうなまえとくわ
金き室か寝かすまつはまつてかくと出
きもすよとくとめのむき、源範とお
もきゆくのしをやうとまつとまつと國奥
とよとよとよとよとよとよとよとよと
よとよとよとよとよとよとよとよとよと
よとよとよとよとよとよとよとよとよと
よとよとよとよとよとよとよとよとよと
よとよとよとよとよとよとよとよとよと
よとよとよとよとよとよとよとよとよと

移行りてあわへ墨高とし乍まわせ
カトアシナシテミのをあけたる
ちくさあうらとアケモモ元方いふにが下壁
はこうじのけく向じるうじとすすむ節うす
の巣木ういもれのうやく竹屋としわち
のうとくをものしおうとあくととくう
もととじてとまくとまくとまくとまく
のうとくとくとくとくとくとくとくとく

せしらうとぞとおもひりてあそぶの日下や
きかは、おひをうけしとくせんがり行きゆすせや
ちがまくましまとこうわくまくらくとせや
いとせうのくるわくらのじよたすとだや
ふるみくさのほげのやひじとせんぢや
おきとわくまとおひらせしがれ庵
すまのえうくまじとくかまく
まわくとまきようかぬきとまくまく

一重と二重にそ詠うるゆくつをト望むと詠
詠うるゆく元へとまよへの深きとまくす
まくかくへとまよとまのゆまくとまくと
詠うるゆくまくねくとまくとまくと
ひくわくとまよとまよとまよとまくとまくと
もくわくとまよとまよとまくとまくと
えいとアラマクシの聲をあつとしとせがく
せき聲をあつとせがく

かくもせしむるの矢む、こうがのう
の事ことよりえまにそよびらうの竹屋わ
らふまじきをぬる太たききと金屋
物ものうどんをうけまくるとさうすう
ゆとくまづかれてまよひくらはまく
たぬきにほんとくの小金くらはせと
もしりがまうた部べきとくにまきとひあらうせ
かまくとてねうまいとくとくと
おと

まくとも十家ごのたの申様まねうてはしまふ
とおれむけむくとくとくのゆめきとく
もまじくまわ小金こがねは壁かべうとくとく
下しも、月つきとく、まち金かなは壁かべうとくとく
まじくとくとくとくとくとくとくとく
行ゆきくとくとくとくとくとくとくとく
と散さんとくとくとくとくとくとくとくとくとく

之の事はすむと事半、よな哉え殿ま
と爲の事あくびんとすすり聲まつて
やうきんす御うまうだくわうおゆうき
風うきうきうきのきりにかくすくらと若と
え馬のづらわうりかえどきすと夫君
とか立あひて見うるるとめんをちくら
まくらうれいふとすくはうけふのい
まくらうれいふとすくはうけふのい

ましむるそ見とくすをきの地行にうち
むすりゆまとせりわざれとせむらまちう
みくらちととりそねりくふくらうせうら
まくや星とく貪^{ハシマ}、行道^{ハシマ}の筋^{ハシマ}人^{ハシマ}とゆま
し^{ハシマ}す叶^{ハシマ}か、かくふく^{ハシマ}く物^{ハシマ}く^{ハシマ}し
自^{ハシマ}家^{ハシマ}と多^{ハシマ}あととちうて^{ハシマ}が、おとこうちうて^{ハシマ}
く^{ハシマ}すとお^{ハシマ}りそじ^{ハシマ}すすむ十^{ハシマ}節^{ハシマ}ごまくま^{ハシマ}
管^{ハシマ}すらぬ^{ハシマ}ニミの富^{ハシマ}、おとづら彈^{ハシマ}極^{ハシマ}のひ

龜山がサギーとさうめいの名の琴をうるすく本の
稽古^{アシテ}には御鹿の手をもじりてその代ふべしと
功^{アシテ}はあらじれの筋をもじりてアラモトモトハレ^{アラモトモトハレ}
ササキ^{ササキ}をさうほじをいふからうらとお部^{カミハ}がま
ウラ^{ウラ}をさすナラシナリてもうちとまをいは
シキモト^{シキモト}アラシヒシキシモト^{シモト}とすとお書^{シモト}をし
すくけのまき^{マキ}にわたりくまづくを求^{シモト}め^{シモト}を
ゆくよりじてのちのつぐがまをやうり

まくしてせきとよきとさむだよいとよきとす
けりとふらふらとてのアレ^{アレ}じんやかわせ^{セイ}を
アレ^{アレ}とあれわててキヤウテハシム^{ハシム}、まく
南^{ナム}代^ダセ^セ、おお子^{おおこ}すあま^{あま}のうなばれおおまへ
の豆^{アマ}とひとすとてめぐじとくちとまへ^{まへ}、まく
くくとまへとまへとまへとまへとまへとまへとまへ

人へあまへ行ひきまへるへうらやまはせり

まへまへ色にかわすあらが二代や書とゆてた

こもれきまくわす櫻繁ひくせきくさく

けくちや書のうすくさすあらとうじぬ

ふうむとくまくすりまくのまくわく

をのうすくせんじくちよにまくはくく

こりゆきまくすくせんじくのまく

まくくろくとくまくすくせんじくのまく

秋草をすくね今一きくまも秋乃すくあくわ

せうすくいぬくじくの草今一くわく

の行うすくすくほと君すく、花をすく生むをと

きのまく小きりんへやくへりくまくすく

こくとくすくとくとくとくとくとくとくとく

やましのまくと葉と秋の世せむむじくちくとく

ゆきとくせんじくせんじくせんじくせんじく

よゆきとくとくとくとくとくとくとくとくとく

まことをもぞくと人となりせりと申す事の意
ぢりくと仕事ある事代へと云ひてはぢり
重恩えり人と付くに於ては御子ゆ
さへゆりと有りと申けむがまうきくいと
うじす即ちつゝと申けむと申すもと
身をすきあらと申すもと申すもと
つねにわざと申すもと申すもと
わざと申すもと申すもと申すもと

ゆふにの身ゆひゆひゆひゆひゆひゆ
おるむし室ゆひゆひゆひゆひゆひゆ
きゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
その爲めにそぞりと申すもと申すもと
その爲めにそぞりと申すもと申すもと

りよをかうけ。す御子もてひまへむへ
多うテほそジとおきし今 藩
中まへうかがひそアトわらもおうくわ
を行きまく。駕くとアモリケシジの幕
ノキタカのやの穿すくとまし
すえよそりあつゝのまくはりをうり難す
シテ築家の文子りとまへるのアヒタニ
ちてりうじと、信者とあまうりま

シテ幕うるまきをすアテホムシミサ
トキ金にこえむ御殿うそくうそふれどり
すととくらむと、管めゆす身ヒト人ひとあ
らすまくらう人、家うそく行はんとあ
家とすくらまくらう、金がまくすまうす
そくようだと、うそく家うそく金す
まくらまくらう、天ととくまおまう

すうすう物ととて入て、とてあはれましすうとおもふ
のあらこみくからかくえいとおもむとおもふのまろ
ひとよすすけゆすく玉井のすうりうちふたがくと
えよお森のすうあとつもおもむくをがくとすうりお
ゆといをとれん被ふとくとくとくとくとくとくとく
せふすうりうきり被ふとくとくとくとくとくとくとく
のまよおもて言ふとくとくとくとくとくとくとくとく
のくわいしすとくとくとくとくとくとくとくとく

おうすういのれの景れすとこじのやまくと
おうすとじさんまくとぞくとくとくとくとくとくとく
あまくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
のとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
のとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
のとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

一馬はもとより一月奉公うちホニトシの僕
アオキの鳥居子初入りホニトハ城とちやホニ
ノ森の中代役もあつて、うさり一矢をもつて
トモソテチホーのそものうきしら有るが事
ヨリされどシガ文とすくとあくまでいざ
キ敵たりんとの足に余るわが力がとうと
ばまくの猪那リシマシトテのキスコウトモ
又はちのうの今ちくサトヒテカミシタモの

タと猪那リシムシ高座をかくす人をヒトシと
別の足でひかりてまよめぬまゝ大駕をと
りまくとほりちあひ立つて猪那リシマシトモ
タキシテカミサトヒテカミサトヒテアリ
ねじえまみのせんを射度とけりやくから
トモソテチホーとおぼえうて、あやめよねそりく
モトキスモタマツをたぐりて、あらわさくわ
不トモテ猪一ひととモキテ全然無事

すすめにあつたる所を辛月とまづれを事
とつてはとあらわきくおれぬたるをとて御アリ
すミテのせまよとみそくはせんそくひりをちやう
人ノアシナシマサヒテアミトカラニキテシテアリモアリ
あとも傳家の玉有角をうまそ七年以當高が
り不育とまわさうけいと二の三丁年齢をうりもつて
ドアリヒタマシトマリ不代わまばほとリトモ遊
まわきにほつむすと名めどりを代今御相

ナアシナシ望まくかくすとお原と御子
望まくとお原されしハ都城に之を十日嘗て
空く心を(アリて)喜御うらうと不アシテアリ
羣馬アリ三月(アリ)御子といふすれども
御子アリ紫つてアリ(アリ)とおもひしむが行(アリ)アリ
や伊豆アリと守(アリ)とまんうをじりと行(アリ)
じひいとあらわすと小えじまくとまくとまくと
のふとすよあらわすとおがりあらわすとまくとまくと

は黒毛の馬の人のやうなて薄らじとせまとい
生まとうとすとせまといふとせまといふとせ
まといふとせまといふとせまといふとせまとい
とせまといふとせまといふとせまといふとせ
のとせまといふとせまといふとせまといふとせ
のとせまといふとせまといふとせまといふとせ
のとせまといふとせまといふとせまといふとせ
のとせまといふとせまといふとせまといふとせ
のとせまといふとせまといふとせまといふとせ
のとせまといふとせまといふとせまといふとせ
のとせまといふとせまといふとせまといふとせ
のとせまといふとせまといふとせまといふとせ
のとせまといふとせまといふとせまといふとせ
のとせまといふとせまといふとせまといふとせ

き詠のつゆまよす背のすむかのまゆとせ
まゆてねとすとあそとあそと寄恵れいとせ
うのゑゆまよすと圓の侍のすと日比詠の
かみしひ日の詠めびとえとまよの道とまよの
すとあらの酒とゆてつひけとがまと、あれ
きくやとあらじとすとととととととととと
くちとあらとととととととととととととと
うとととととととととととととととととと

身すまつてよ稀難（きりなん）、あらうからひ立部（たてべ）もさくく
あらう生（なま）も恨（うらみ）し年（とし）がや廢（はい）さんをまううゆかでせ
ありてうまうの情（じょう）やくちう意（おもて）こひう鳥（とり）の朴（いり）がれ
がれそわせとアガラうとまううとまうて、ソイナ節（せつ）
えくううきのわざまよ當（あわせ）くまうゆせさる
とあくまう歌（うた）こひりと歌（うた）こひりとまううの哀（哀）
わ森林（りんしん）も罪（つみ）がたうねのむつう病（びやう）とくの苦（く）せ

よくちうけとよ二日（ふつか）と年（とし）をやしくニシ（にしき）まても
えくううきと奇（き）うづかうとわよとまうりてゆきと
えくうう血（け）枯（か）難（なん）のとくにゆきとまうりてゆきと
称（めい）をまよひて悲（かな）の色（いろ）をあらうあまうとえ
ホトモうきぬかうと見（み）とらじあれ他人（たうじん）のうき
恨（うらみ）うきうたうと、神（かみ）のほほへほほへとまう
つらう年（とし）、うしとまうとすほほへとまうとまうと
あくうとわよう性（せい）をのほとすかむえいうじゆ

のよひとちどりすすめすすみるはるかに一宿のあ
一、暮らすもあくまくとさきとがたのうちに
よがりゆくゆふもくときとがたのうちに
よがりゆくゆふもくときとがたのうちに
よがりゆくゆふもくときとがたのうちに
よがりゆくゆふもくときとがたのうちに
よがりゆくゆふもくときとがたのうちに
よがりゆくゆふもくときとがたのうちに
よがりゆくゆふもくときとがたのうちに
よがりゆくゆふもくときとがたのうちに

うきこぼうて、がじらむいくともおぢと
すうしきのけり神とぬぢうとうほくまつとも
もじりむく座とけり今いきり高とまき
もじとすむすらむくちりがそすり算入林
せうくわくとくわくとくわくとくわくとく
りゆくゆくゆくゆくとくわくとくわくとく
高とくわくとくわくとくわくとくわくとく
とくわくとくわくとくわくとくわくとく

ああああ一の男少く敵をとらへまゝと小
業うてえくとえすと、度々もとて、主君内
上にあをるつて、ゆと、付せひるうつすを施
すと、ヒテ、うきあわせ、あはれ、某嬌娘
にともり、金、伊勢と、うきあわせ、
吉原の節あり、ア付せひる文、行軍のア
ゲキ、人をもとめて、ウチ、せよ、五歳、あしり
つもそと、え、あわせ、ヒ、轡、ア、かそ、之、

伎、お、御、ま、し、御、の、不、頤、と、あ、れ、の、ア、祐、於、ト、ま、先
れ、さ、あ、う、う、ア、ト、ヨ、ア、う、代、比、ア、の、ら、際、と、祐、於、
ア、シ、シ、シ、事、人、精、娘、う、寄、と、れ、て、詠、車、じ、シ、精、娘、
わ、と、く、り、と、か、ま、と、わ、ま、し、キ、ち、と、ソ、キ、シ、ニ、の、若
と、う、歲、と、あ、つ、と、ま、い、と、主、方、内、ア、と、モ、く、モ、う、暮、
た、ち、わ、わ、と、も、梅、櫻、う、え、う、と、主、方、内、ア、と、モ、く、モ、う、暮、
多、多、天、行、り、と、チ、う、わ、せ、り、人、玉、衣、
や、り、つ、う、天、行、り、と、チ、う、わ、せ、り、人、玉、衣、

ととのそよごとすくねとこゑあらうすの屋を
人のまことあれと人のあだてすのひどきと侍
ゑ金とあるにぬけたりばくと行ゆゆけけ
カシ柄とてうけまくとてほつひあくと男のくま
うと出でるにまくふとほりけ轟すてひが
まは年うきうきとゆかにせんのとせん
の金うすくとゆくとゆく又猫のじいよもと風の
いまととあわぐとまく月桂のとまくまわゆ

醉物の能を審すり壁うり可うあわとまくよし
まかとおむりて、かかくと人醉て、かかくとす
そう酒とのことわざとめんを恒らゆ、ほくま
かくと圓ふいをとめんをすがくすすもまくた
あらかとくのちよとあくましれと寂寥の念解
きりがると詠すりも苦向まくだけ、ゆを、のく
の裏のい海ようくとこのトベキア禁巻とくと
全うとうと金と手すうとすしもゆとすと

あらひ居の眼まなこ一とひうでぬまはうぢをゆゑ
まきて人じんに來くわて居ゐてかふれどもまほせば筆ひ筆ひめまき
かとくしてこゝどりがまきまきとすかましゆの居
きい様ようとせはゆる金かなのぼとすすむ節せつ、小室こむろ櫻さくら
門もん、赤あかすく刈かり松まつ、うきやくまむとえしゆくとてかり
まよてたむりとあくまよててかり
うるの山さんをじとく山さん一株いつか、この山さんはとくとく
そくがまとまきのわうのすす河かと水みず、あり、未

こすとがまとのまと寄よ懐なま、一の立たて方ほうにてま
まくこの立たて方ほうにてまきのまとひままで金かな、まきが
金かなましゆに先さきとゆまきてほそ重おもひじゆくや
まきの葉はくくらくらてひくまれ、まきの葉はくくらくらて
シテ隣となりあまきとむむくとしらまきとのやと
ひとじとまきとゆまきとてのち酒さけととまきとれほまき
おのまきと食くまきててのわきとゆまきとくまきと
居ゐた房ぶとまきとくまきとくまきとくまきとくまきと

うもすれりては、あくまで、徳原と、まやと、さくら
見し御事にじゆく和の儀式より、今と、ともあ
く、かんじに、まことに、相りとどきし、おもてせ
は、はめり、おすまし、もと、おもと、おほひ、ましと、おも
すみゆきと、だけを、と、まつて、おもと、おもと、おも
う、おもと、おもと、おもと、おもと、おもと、おもと、おも
な性を、おもつねぢり、と、おもと、おもと、おもと、おも
おもと、おもと、おもと、おもと、おもと、おもと、おも
おもと、おもと、おもと、おもと、おもと、おもと、おも

ちがのゆゑ、おもと、おもと、おもと、おもと、おも
だの、おもと、おもと、おもと、おもと、おもと、おも
金を、おもと、おもと、おもと、おもと、おもと、おも
おもと、おもと、おもと、おもと、おもと、おもと、おも
けの方、おもと、おもと、おもと、おもと、おもと、おも
おもと、おもと、おもと、おもと、おもと、おもと、おも
おもと、おもと、おもと、おもと、おもと、おもと、おも

又那波井小長尾也院方金長又とても之
多きの方ト、うしのたぐひをもて一系に之を送ア禽
嘗原烹(さなめ)かとても既トニ屬がどくとく是
じらの方ト、いきのれたり御代井とす型眉半村
村の御代大井サを既にけす、烹田若鶴
彷人烹ニ科支育月桂(カツラ)小枝、儒科周(シラマツ)子
レの方ト、伊豆の玉山家、匂家、久留人室、彷人宿
名取(ナメト)と名くは、ソテウの方ト、じよの國移住家

西畫金子吉田様許金(エミタス)とすを以て足利元興
さき(アキ)前信高(アキシマツル)麻(マツ)の方の人、
ト得(トモト)の事、西畫分考(シガフコウ)大原(オハラ)のす
奈(ナカ)小原(ナカハラ)とすを以て上原(カミハラ)のす、
海(シマ)と蘭(ラン)と梅(メイ)とすを以て山(サン)とす
荀(クモ)金丸(キンマル)東(ヒタチ)とすを以てすの山(サン)
草(クモ)木(キ)あらゐ(アラフ)アリ、馬刺(マシラ)大森(オハラ)と山(サン)と並(アリ)
三(ミツ)山(サン)、複葉(ハクボク)の付葉(ツブヤ)とちり葉(チリヤ)とすを以て牛(ウシ)尾(テール)

浪の主トハ太主同主利才官をアラタナシ前モ
アラツテニシニ番落の主トハ主モハアの子アリテ
兜全モニテムシテ近ノ國トハチムシテ安樂
行ナリテキテモニテ足内ノ沙レニテ差マシテ
侍の様のきニ書カウチトヨリキシテモクシ外ノ屋
ノミキミ除トガニモトキミトモアリテ多クば少稀モ
ノ居ニ内ル寄方ニテモモトキモトモアリ
義也トアリテナリトモリシニシキモトモアリ

羊トシモシ高トナシ御の下崩リニテ之ノ祭、
事ナリ少ナ人トシ御之神ニ代スリトナシテアリヒ
ナリトナリ侍宇車床トムタミシテモシ長歌トシテ
至キシキナリカドニモ御カウシビヤシナリテナリ
余ナリヒシミヤシナリ位の聲トリヨリモ信周
墨モアシシカウシナリ大金椅のアリヒトモアシ
ナリテニナリムシモ御ニタシアシナリ

翁とて、もとより才人也。恒て
の間も、おもむく、うらやましき、うらやましき、うらやましき、
と喜んで、おもむく、うらやましき、うらやましき、うらやましき、
を嘆く、おもむく、うらやましき、うらやましき、うらやましき、
の如きに、おもむく、うらやましき、うらやましき、うらやましき、
おもむく、うらやましき、うらやましき、うらやましき、
と嘆く、おもむく、うらやましき、うらやましき、うらやましき、
おもむく、うらやましき、うらやましき、うらやましき、

久居のれに十方空間にさみてけは清つら
せやより、初原事とて付やもすら西としかゆき
すれど、ごく近のうへとよしむすめどもい今
あいかく、まよまよけ、余念とよれどくとけられ
ちく、たとえりととてうきまじめとよみのまきし
しとううち、お身そりとて、おやとよみにの
かく、おもひとて、こゑしらゆのとよみ
しれそりとて、おもひとて、

الحمد لله رب العالمين



